

【図1】

「田中説の気候変動は自然変動」と「IPCC温暖化暴走モデル」

- IPCCモデルと赤祖父・田中説の自然変動の図示です。
- IPCCモデルは1970年～2000年の気候温暖化のトレンド（図の赤線）を、CO2の増加による放射強制力をモデルに組み込み、延長したものであることが判ります。
- IPCCモデルは4つのRCPシナリオの集約です。RCPについては[P2]を参照下さい。
- IPCCモデルは仮説であり、いずれ、誤謬が明らかにされるでしょう。

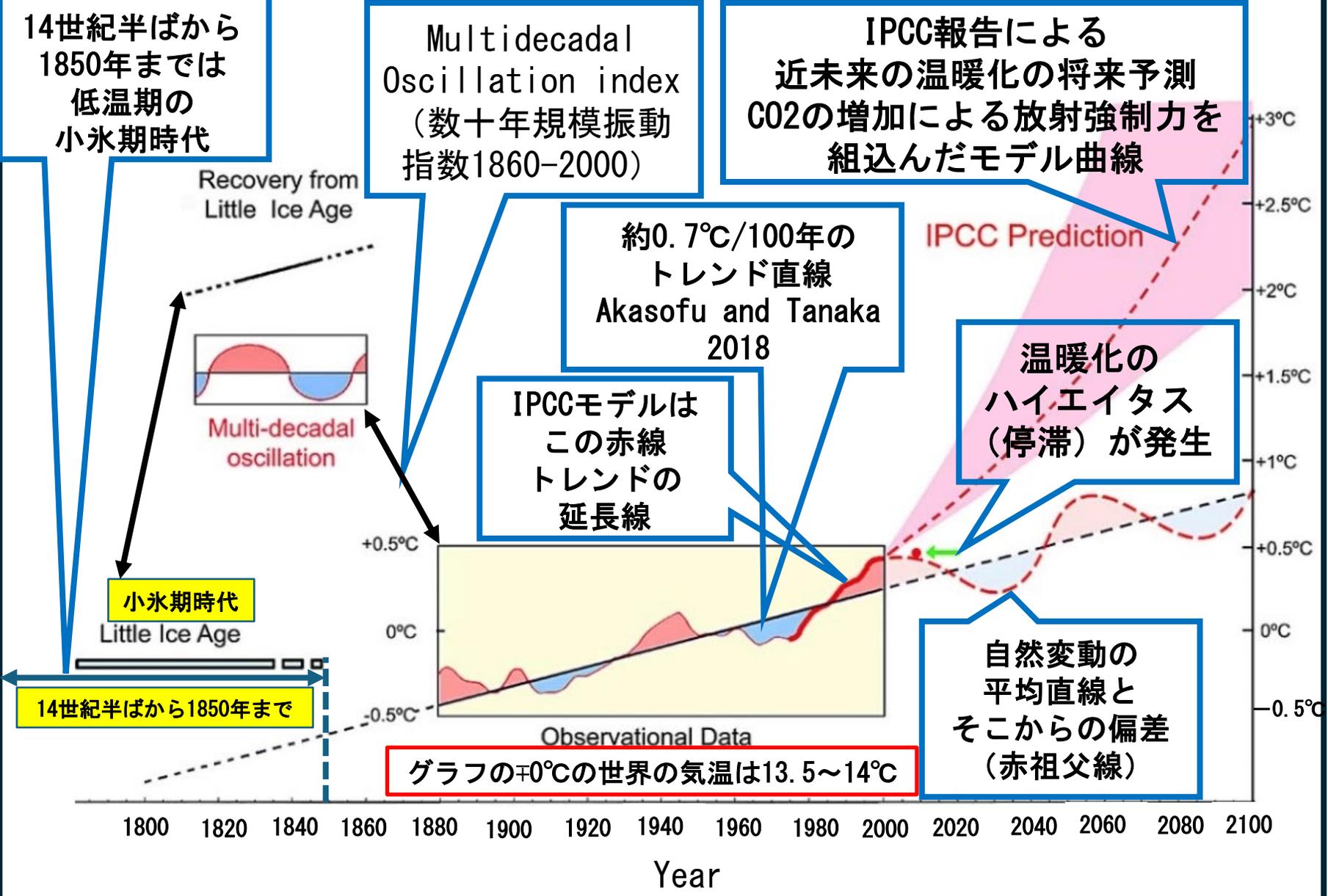


図1 1800年から2100年までの気温変化 (Akasofu and Tanaka 2018)

国際環境経済研究所 H・P

IPCC Prediction (将来予測) の内訳としてのRCPシナリオ (Representative Concentration Pathways : CO₂などの濃度経路シナリオ)

P1の「IPCC prediction」内訳である4つシナリオ・RCP2.6～RCP8.5の説明

IPCC predictionは4つのRCPシナリオで構成されています。シナリオ名の2.6～8.5は、各シナリオの温暖化対策の結果による、CO₂の2100年における排出量の数量（RCP8.5では8.5W/m²）を名前に付しています。

また、各シナリオの対策に応じた、気温の上昇予測を1986～2005年の基準値比の差で予測しています（表）。

RCPシナリオ図（℃、年）

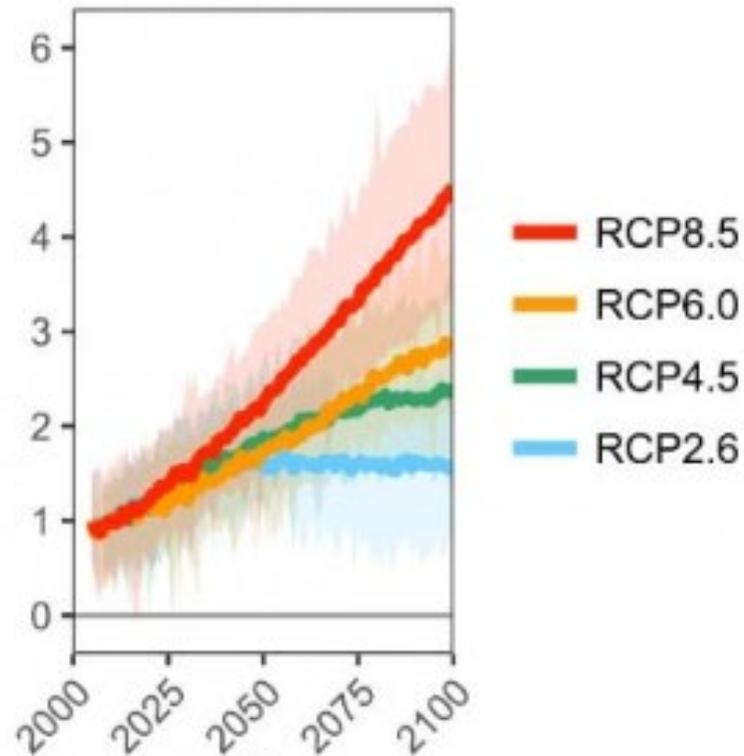


表. 1986～2005年を基準とした21世紀末の世界平均地上気温の予測

シナリオ名称	温暖化対策	平均(℃)	「可能性が高い」予測幅 (℃)
RCP8.5	対策なし	+3.7	+2.6～+4.8
RCP6.0	少	+2.2	+1.4～+3.1
RCP4.5	中	+1.8	+1.1～+2.6
RCP2.6	最大	+1.0	+0.3～+1.7

略称	シナリオのタイプ	2100年 放射強制力
RCP8.5	高位参照シナリオ	8.5 W/m ²
RCP6	高位安定化シナリオ	6.0 W/m ²
RCP4.5	中位安定化シナリオ	4.5 W/m ²
RCP2.6/2.9	低位安定化シナリオ	2.6/2.9 W/m ²